

森里海連環学に基づく東北復興のための
第3回京都大学学生ボランティア事業報告書

(平成24年9月23日～27日)

京 都 大 学

目 次

	頁
1. 第三回学生ボランティアの派遣	2
2. 参加者	3
3. ボランティア参加学生による学生交流会企画書	4
4. ボランティア活動内容	7
5. 参加学生によるボランティア活動報告会	9
6. 参加学生の感想(よかった点および改善・検討すべき点)	11
7. 今後のボランティア活動に関する課題、留意点	15
8. 記録	17
(1) 記録写真	17
(2) 第三回学生ボランティア派遣の応募チラシ	25
9. 特記事項	26
10. 謝辞	26

1. 第三回学生ボランティアの派遣

京都大学は、2012年9月23日から9月27日の間、ホームページで公募した学生20名と教員・研究員3名、事務職員2名を宮城県気仙沼市の宮城県気仙沼高校および同市西舞根地区の水山養殖場に派遣し、東北復興支援ボランティアを展開した。

ボランティア参加学生募集は7月17日からインターネットを通じて行い、7月19日には定員を満たしたため、募集を打ち切った。8月3日にボランティア参加者説明会が開催された。第一回および第二回に派遣された学生の一部が参加し、第二回の際に気仙沼高校との交流会を学生独自で企画し、前もって高校との情報交換を行ったことなどの経験談が伝えられた他、第三回への継続企画が提案され、これに対する積極的な協力が第三回参加学生にも要請された。

復興が進みつつある被災地では、労働ボランティア活動への需要は減少傾向にある。水山養殖場でもカキやホタテの養殖が順調に回復しつつあり、養殖カキの生産量は宮城県下で第一位となった。今回はそのことを踏まえ、水山養殖場での活動を1日に限り、教育支援といった大学の特徴を生かしたボランティア活動を中心においた。

今回の活動も、前回同様、学生諸氏はしっかりと自己管理を行い、病気にかかったり怪我を負う者は一人もなかったことは幸いであった。また、京都大学生として恥ずべき行動もなかったことは、学生諸氏の真摯な活動の結果である。

今回のボランティア派遣は、引率に当たった5名の教員、職員のほか、本事業総括した本部リスク管理課、実務にあたったフィールド科学教育研究センター事務室および森里海連環学教育ユニット、荷物の運搬・積み込みにあたった北白川試験地の職員の努力により成し遂げられた。ここに厚くお礼を申し上げる。

第三回京都大学学生ボランティア引率者代表

フィールド科学教育研究センター 教授 徳地直子

2. 参加者

ボランティア (20 名)

氏名	学部／研究科	学科／専攻	回生
青木 茜	農学部	地域環境工学	4
青山 剛	農学部	森林科学	3
伊豆 菜津美	農学部	食料環境経済学	4
井上 優子	総合人間学部		3
大西 洋	工学部	情報学	4
金子 世玲那	総合人間学部		1
川田 哲也	理学部		4
斉藤 光史	総合人間学部		3
佐藤 安寿子	農学部	森林科学	4
佐野 匠	農学部	地域環境工学	4
重野 紘輝	理学研究科	化学	M1
鈴木 健人	農学部	地域環境工学	4
谷崎 佑磨	法学部	法学部	2
出屋敷 綾音	薬学部	薬学	2
深津 浩佑	農学部	食品生物科学	2
松本 祐太郎	法学部		4
森下 舞	総合人間学部		1
安河内 竜二	農学部	応用生命科学	5
矢野 智史	公共政策大学院		M2
山本 弥佳	教育学部	教育学部	3

引率(5 名)

氏名	所属・職名
徳地 直子	フィールド科学教育研究センター教授
横山 壽	学際融合教育研究推進センター特定准教授
牛田 俊夫	農学研究科等総務課課長補佐
辻 英祐	農学研究科等経理課専門職員
宋 泳根	学際融合教育研究推進センター研究員

3. ボランティア参加学生による学生交流会企画書

以下は、気仙沼高等学校の生徒と交流会を催すにあたり、ボランティア学生たちが事前に活動計画をまとめ、気仙沼高等学校に 2012 年 9 月 13 日付けで提出した企画書の文面である。

1、企画背景について

- ・京都大学は、昨年の東日本大震災を受け、気仙沼を含む東北地方の復興に貢献するために、長期的にボランティア活動を行うことを計画している。
- ・今回はその第3回にあたるが、第2回の交流会報告書をもとに、気仙沼高校の生徒の皆さんの今後にとって意義のある交流の実現を目指して学生主体で議論を重ねてきた。

2、企画目的について

前回の交流会同様、気仙沼高等学校の生徒に対し、ボランティアに参加する学生が、自身の高校生活及び大学生活の経験を様々な手段で伝えることにより、生徒のこれからの学習計画や将来の目標を考える上での参考としてもらうことが目的である。

3、日時および対象

日時:9 月 24 日(月)・25 日(火)

各7限目～放課後終了まで(14:50～18:00 を想定)

場所:宮城県気仙沼高等学校 校舎内

対象:9 月 24 日 宮城県気仙沼高等学校 1 年生

9 月 25 日 宮城県気仙沼高等学校 2 年生

ボランティア参加学生:20 名

(所属学部:農学部、理学部、工学部、薬学部、教育学部、総合人間学部)

4、企画内容について

9 月 24 日(対象:1 年生)

第7時限

<形式>

- ・20 名のボランティア参加者が分かれ、それぞれのクラスに対して 2、3 名の担当者を設けて 1 年生の各クラスの生徒を対象に発表を行う。
- ・必要に応じて配布資料、ポスター、写真などを用いるが、プロジェクターやパソコンのような機材は使用しない。
- ・発表にあたって、資料掲示のために黒板(あるいはパネル)を使用させていただく可能性がある。

<内容>

事前アンケートにおいて関心が高いと思われるいくつかの項目についての話を交えながら、自身の経験に基づく発表を行う。その際、なぜ今の進路を希望したのか、高校生の時自身がどのように感じ、現段階では将来についてどう考えるのか等、各々の参加者の思い、経験、考えを中心とする。(したがって、すべてのクラスで異なる内容の発表を行うこととなる。)

放課後

<形式>

- ・生徒会あるいはボランティアクラブの生徒との交流の場と、全校生徒が自由に出入りのできる座談会場の二つの会場を設ける。
- ・座談会場として1教室(人数の増減に対応できる大きめの教室)、生徒団体との交流の場として、団体人数+10名ほどが入りきることのできる部屋(教室、会議室等)1部屋を必要とする。

<内容>

生徒団体との交流

- ・長期的なボランティア活動を目指す上で、気仙沼を含む東北地方の復興に今後必要なことは何かということについて議論する。
- ・実際に東北地方で行われているボランティア活動についての理解を深め、時勢にあったニーズについて考える。
- ・その他様々なテーマ・分野について、生徒側からの質問・相談にこたえるなど、自由な会話をを行う。

座談会での交流

- ・授業中では触れることのできない部分や7限の交流を通してさらに聞きたいと思ったことなどについて、フリートークという形で質問に答える。(進路選択や学校生活についてなどの相談・質問に答えたり、私生活などについて個別に会話したりするなど、気楽に交流できる場を想定している)

京大学生ボランティアが現地で支援をするにあたって、気仙沼高校とのつながりによってできることが多様になると考えている。その意味で、これら二つの交流は、気仙沼高校と京都大学とのつながりをより強いものにするために、より近い距離で生徒と交流し、親睦を深めることを目的としている。

9月25日(対象:2年生)

第7時限

<形式>

- ・20名のボランティア参加者が6テーマ、10教室に分かれて2人1組で担当する。
- ・2年生を対象に事前に各々の希望によって生徒を10教室に割り振っていただき、担当する教室の生徒を対象に発表を行う。
- ・必要に応じて配布資料、ポスター、写真などを用いるが、プロジェクターやパソコンのような機材は使用しない。
- ・発表にあたって、資料掲示のために黒板(あるいはパネル)を使用させていただく可能性がある。

<内容>

発表を行う6つのテーマは

- ア) 大学の授業(教養科目・専門科目、大学院の授業)について【2】
 - イ) 課外活動(サークル、アルバイト)について【2】
 - ウ) 受験勉強について【2】
 - エ) 研究内容(文系、理系)について【文理1ずつの計2】
 - オ) 一人暮らしについて【1】
 - カ) 京都について【1】
- とする。

※【】内の数はそのテーマにおいて必要とする教室の数を表す。

10 教室の各教室で担当者が各自作成した資料を配布し、その資料に沿った発表を行う。

放課後

内容、形式ともに 24 日に準ずる。

5、企画実施にあたって

・当日の貴校への到着にあたって

24 日・25 日について、それぞれの交流日に貴校の担当者の方に挨拶をして、簡単な打ち合わせをさせていただきたい。また、出来れば小さな会議室などを、昼休憩、荷物の置き場のための場所としてお借りしたい。

・当日の貴校を出発するにあたって

24 日・25 日両日ともに、18 時完全撤退ができるように努める。

・当日訪問させていただく構成員

学生ボランティア 20 名、ならびに、教職員、事務員が引率という形で帯同する。

6、企画実施後の対応

・生徒、先生方を対象に事後アンケートを実施することにより、次回以降のボランティアを行う上での改善点を見出す。

・気仙沼高等学校と継続的に連絡を取り、ボランティアへの新たな要望を把握する。

・京都大学あるいは学外におけるボランティア報告会を積極的に行い、活動の内容の周知に努め、今後の復興やボランティアのあり方に一石を投じる議論を喚起する。

・京都大学内あるいは学外におけるボランティア報告会に積極的に参加し、活動内容の周知に努める。

4. ボランティア活動内容

9月23日(日) 雨のち曇り

6:30 京大時計台前集合、荷物積込（軽トラック）

6:50 出発

8:55 南条SA 9:10 発

12:15 名立谷浜SA 昼食 12:45 発

15:30 磐梯山SA 15:40 発

18:16 金成PA 18:30 発

19:10 一ノ関駅前着。牛田と辻はバスを降りて、レンタカーを借りる。学生1名合流。

21:20 宿舎「からくわ荘」着

21:30 夕食

9月24日(月) 曇り、時々雨

7:00 朝食。出発まで宿舎で準備。

10:00 横山、牛田、辻はレンタカーで先に宿舎出発、途中水山養殖場に立ち寄り、畠山信氏に挨拶。

11:00 バスにて宿舎出発

11:45 「お魚いちば」にてバス、レンタカー合流、付近で昼食。

13:30 気仙沼高校着 校長他関係教諭へ挨拶および小会議室で準備、現地印刷業者に直前発注した資料を受取

14:50～15:35

7限目授業 1年生7クラスを対象に20名の学生が各クラスに分かれて、事前アンケートを基に生徒の関心が高い事項について学生の経験に基づいて発表。この間、横山と辻は気仙沼市役所震災復興・企画部の震災復興・まちづくり推進課の吉田課長補佐を訪問し、挨拶。

16:00～17:45

1年生生徒と座談会（A、B教室）

18:00 気仙沼高校発

18:50 からくわ荘着

19:10 夕食、その後学生たちは男子部屋で25日の準備

9月25日(火) 曇りのち激しい雨

7:00 朝食

8:00 出発

9:00～11:00

八葉水産到着後、社長と常務より事業の内容、震災の被災状況およびその後の復興について説明を受ける（復興の鍵となったのは、敷地の地盤が比較的固く、地盤沈下が比較的少なかったこと、政府による復興資金を利用できたとのこと）。その後、2班に分かれてメカブの製造工程を見学。

11:00～12:00

「お魚いちば」にてバスを駐車し、付近で昼食。

12:00 鹿折地区に移動し、復幸マルシェで買物。周辺の被災状況を視察

13:30 気仙沼高校着

14:50～15:35

7限目授業 20名の学生が2年生を対象に6テーマ（大学の授業、課外活動、受

験勉強、研究内容、一人暮らしおよび京都)、9 教室に分かれて 2 人 1 組で担当。
資料を配布。

16:00~17:45

2 年生生徒と座談会および生徒会・ボランティアクラブとの交流会 (A、B 教室)

18:00 片付けおよび掃除の後気仙沼高校発

18:50 からくわ荘着

19:10 夕食

9 月 26 日(水) 快晴

7:00 朝食

8:40 御崎海岸にて写真撮影後出発

9:10 水山養殖場到着後、畠山重篤氏より養殖場の概要、震災の被災状況およびその後の復興について説明を受ける。徳地は辻運転のレンタカーで一ノ関へ、その後帰京。

9:50~12:00

畠山哲氏の指導によりカキの貝掃除の作業に従事

12:00~13:00

弁当による昼食、休憩

13:00~15:00

カキの貝掃除の作業に従事、辻、合流。

15:00 畠山哲氏によるカキ養殖場案内、カキ養殖工程の説明

15:45 水山養殖場発

17:00 巨釜海岸散策後からくわ荘着、長靴とビブスを回収

18:10 夕食

20:00 懇親会

9 月 27 日(木) 晴れ、時々時雨

6:00 朝食

7:00 出発 牛田と辻はレンタカー

9:45 レンタカー返却後、全員バスに搭乗

10:58 仙台南 IC 前で事故渋滞(~11:02 解消)

11:33 国見 IC まで 2km の付近で渋滞(~11:45 解消)

11:54 福島西 IC まで 2km の付近で工事渋滞(~11:58 解消)

12:02 渋滞(~12:15 解消)

12:30 安達太良 SA 着

13:15 昼食後、安達太良 SA 発

15:57 米山 SA 着 16:17 発

18:20 小矢部川 SA 着 16:37 発

20:56 多賀 SA 着 21:09 発

21:55 三条京阪にて学生 4 名降車

22:10 京大着、解散、荷物搬出(軽トラック)

東北自動車道の
復旧工事は平日に
集中して行われてお
り、断続的に渋滞

5. 参加学生によるボランティア活動報告会

シンポジウムにおける活動報告

2012年10月11日（木）に、キャンパスプラザ京都で開催されたシンポジウム「森と海の未来力（ちから）～子どもたちに手渡すべきこと～」（一般市民250人参加）において、第3回学生ボランティアに参加した学生3名がボランティア活動の報告を行った。

11月祭における報告会

2012年11月22日（木）から25日（日）にかけて、吉田南総合館の共西03講義室において、過去3回のボランティア派遣学生による報告会、討論会、ポスター展示、ドキュメンタリー映画上映や東北地方の物品販売と売上金の東北復興への寄付などが行われた。これらの日時と内容を以下に示す。

イベント	日時	内容
ミニ・サミット -1	11月22日 14:00~16:00	京大ボランティアの特色である「教育ボランティア」に関連させて、東北復興と今後のあり方について来場者と議論した。
ミニ・サミット -2	11月23日 14:00~16:00	現在行われている東北復興に関するボランティアの特徴・問題点を踏まえ、あるべき支援のあり方を来場者と議論した。
関西学生サミット	11月24日 13:30~16:00	関西の学生ボランティア団体および特別ゲストとして永田素彦京大准教授（社会心理学）を迎え、各団体の東北や関西における活動報告を基に、今後の復興支援のあり方を来場者とともに議論した。
映画「手のなかの武器」上映会	11月25日 10:30~12:30 14:00~16:00	震災直後から被災地に入り、撮影を行った吉本涼氏によるドキュメンタリー映画を吉本氏の解説つきで2回上映した。
ミニ・サミット -3	11月25日 14:00~16:00	京大が派遣した過去3回のボランティア活動を総括したうえで、今後の京大ボランティアのあり方を来場者と議論した。

「文部科学省 東日本大震災復興支援イベント～教育・研究機関としてできること、そしてこれから～」に参加

2013年3月11日（月）に文部科学省庁舎前の中央ひろばで開催された上記イベントには、計54の国立大学や独立行政法人がそれぞれブースを設け、これまでの取り組み内容を紹介しました。

京都大学からは地球環境学堂の助教1名、研究院1名及び学生2名の計4名、経営管理大学院の客員教授1名と学生1名の計2名と共にフィールド科学教育研究センターから徳地直子 教授と学生1名の計2名が参加しそれぞれの復興支援活動を報告しました。

当センターが進める「森里海連環学」の実践フィールドである気仙沼が大きな被害に遭われたため、この地を学生ボランティア派遣先を選んで、全学窓口となり半月に1回の計3回にわたって実施した植樹作業、牡蠣養殖場復旧作業、気仙沼高校での学習支援、水質・生態調査などの活動をポスター展示と活動報告書を配布して紹介しました。

老若男女を問わず、多くの一般の方や政府関係者など約2,000名の来場があり、本学の取り組みにも熱心に耳を傾けていました。途中、下村博文 文部科学大臣と森口泰孝 事務次官も立ち寄られ、本学の活動内容に理解を示されました。

6. 参加学生の感想（よかった点および改善・検討すべき点）

参加学生により、今回のボランティア活動に関する感想・意見が、よかった点および改善・検討すべき点として集約された。

よかった点

- ・東北の現状を自分の目で見る事ができたことが大きかった。
- ・中長期的な視点での震災復興支援が重要であること、まだまだ震災復興支援が必要であることを再認識した。
- ・フィールド研が提唱する森里海連環学を、実体験を通して学ぶことができた。
- ・畠山さんのお話が良かった。
- ・現地の企業の方などのお話が聞けて良かった。今後も行っていきたい。
- ・第2回ボランティアメンバーのサポートがありがたかった。
- ・フィールド研の方には、PCやメール、直接のやり取りにとどまらず、ミーティングに参加していただいたり、企画内容にアドバイスをいただいたり、現地での活動の記録を残し、提供してくださったりと、大変お世話になった。
- ・回生や学部を指定していないので、多様なメンバーが「自然に」集まる。
- ・京大HPのお知らせコーナーを定期的にチェックしていないとこのボランティアには参加できないので（農学部以外は特に応募期間を考慮すると）、「自然と」やる気のある学生が応募するようになっているのではないかな。
- ・参加する学生の学年・学部も様々なので、中長期的にサポート体制を維持しやすい。
- ・メーリングリスト、PC上での情報共有、小規模ミーティング、朝活の奨励、1人1役割制（ex. 気仙沼高校への連絡係、チラシ・ビラ作成係、アンケート係、レクレーション係、会計係）を導入することによって、活動時間の確保と効率化が図られるようになった。
- ・教育支援という自分たちにできることが取り入れられているので、取り組みやすかった。
- ・気仙沼高校との連絡についても、先生方とのやり取りだけにとどまらず、生徒会やボランティアクラブといった学生間でのやり取りもでき、次回以降の企画の幅が広がった。
- ・NF（11月祭）での企画を通して、他団体の活動内容・組織運営を学ぶことに加え、現地での活動以外にもできることを広げることができると思う。
- ・前回のボランティアメンバーは言うまでもないが、有名企業や国家・地方公務員、民間企業研究員などへの就職を実現された多くのボランティアメンバー（OB・OG）の方を、

目指すべき存在としてとらえることができる。

- ・主体性や企画立案力、交渉力、プレゼン力などを、体験を通して養成できることからして、「公的職業訓練（OJT）」の役割をこのボランティアが担っているのではないか。

- ・フィールド研、事務員さんの間での引継ぎが順調に行われているため、話が進めやすい。

（ex. 佐藤准教授⇒柴田教授・徳地教授⇒横山准教授）

- ・学生負担が軽減されるよう配慮されている。

- ・（今回は特に）活動報告会としてはこれ以上ない素晴らしい機会がいただけた。

- ・突如 NF の話を持ちかけたにもかかわらず、フィールド研がご検討下さっている。

- ・第4回への意識をすでに持ち始めているメンバーがいる。

- ・第4回京大ボランティアの宣伝ならびに、中心メンバーの勧誘を NF にて行おうとしている。

- ・第4回京大ボランティア終了後の報告会まで考えている。（ex. 新入生向けの説明会）

改善・検討すべき点

- ・前回のメンバーがどのような経過を経て、企画の立案をしたのかというところをもっと知りたかった。採用されなかった企画案も示してほしかった。

- ・最初、なぜ教育支援に至ったのかが分からず、どのように取り組んでよいのかわからなかった。

- ・次回以降も教育支援でいくのかについては、第4回メンバーに一度意思を確認した方がよいのでは。（第4回メンバーの独自さが失われるのではないか。）

- ・教育支援は確かに役立つと思うが、もう少し気仙沼地域などマクロな視点での活動に踏み込めないのだろうか。

- ・もっと現地の人・団体・行政のためになること、つながり・交流ができないのだろうか。

- ・現地のニーズ、現状をもっと学習・調査してから現地に赴くべきではないか。

- ・（理由はよくわからないが、）上回生（3/4 回生・院生）が多く参加されるものの、学業・就活・院試などで多忙になりがちで、サポート体制に協力しにくい。少なくとも学年の応募比率をメンバー選抜において考慮してもよいのでは？ 1/2 回生の参加が重要。

- ・少数の有志者によるサポートは、負担の押し付けになるのではないか。募集要項に事後活動の存在・協力の条件も記載すべき。

- ・メーリングリスト・PC の情報を常に確認できるとは限らず、また誰が確認し共有しているのか把握することが困難で、かえって混乱をもたらしたのでは？ チェック機能を導入すべき。

- ・小規模ミーティング・役割分担を細かく設定したために、それぞれの情報共有が軽視されたのでは？全体を俯瞰し指示する者が必要であった。
- ・終わった後のモチベーションをどのように維持するのがよいのだろうか？
- ・募集においては、志望動機と事前説明会・勉強会・懇親会への参加可能性・有無をもっと評価すべきではないだろうか？（先着順だけではよくない。）
- ・前回までの参加者枠を別に設けてほしい。20人枠を減らすのではないかという思いから参加を躊躇してしまいかねない。
- ・将来的には参加枠を拡大すべき。（参加費を1.5～2倍にしても。）
- ・新規：リピーターを2：1ぐらいに設定できないか。
- ・（前回のメンバーなどが）ボランティアメンバーの選抜のプロセスにかかわることはできないのか？面接の導入も検討したい。
- ・研究ボランティアの調査対象が制限されすぎているのでは？
コミュニティ研究者などをこちらから声をかけて参加してもらうぐらいにすれば、そこから新たなボランティアの在り方が見えてくると思う。学生だけで難しいのであれば、他学部の研究員などにも声をかけてみたいのだが可能なのだろうか？
- ・学生主体の事前説明会の告知・周知を徹底すべき。回数を増やすことも大切だが、参加の有無をメンバー選抜における考慮材料にできないか。
- ・勉強会とは言わないまでも、事前に現地の情報をもっと知る・学ぶ場がほしかった。
- ・懇親会が必要では？前回メンバー・フィールド研との交流や京大ボランティアの意義や目的を分かってもらうことで、企画に積極的に携わってもらえるようになるのでは。
- ・一方で、日頃忙しいのであまり事前準備ができなくても関心が強い人が落とされないような配慮は必要ではないか？
- ・応募要項に、事後報告会～新入生説明会（NF）～次回へのサポートへのできる限りの協力を応募条件にすべきではないか？
- ・（特に春は卒業旅行の一環などの）安易な参加意思を防ぐため、費用負担・応募動機欄の基準をもう少し高めに設定すべきではないか？
- ・活動内容が複雑・高度化するにつれて、引継ぎをどのようにするのか？
- ・募集時期をもっと早めに設定して早めに準備を始めたほうが、結果的には負担が軽減されるのでは？ただ、早すぎると予定が不明のため申し込む人が減るのでは？補欠要員なども多めに確保しておいて調整できるようにしておくことが望まれる。
- ・少なくとも帰りは夜行バスを導入するべきではないか？1日活動日が増えることで幅が広がるし、挑戦的な企画も立案できる。

- ・学生の多様性による企画の発展を狙って、学部以外の情報（サークル・特技など）もメンバー選抜において考慮できないのか？
- ・活動終了後は、各自レポートを提出するようにする。（A4 2～3枚）
- ・畠山さんのもとでの活動は今後も続けるべきなのか？
- ・防潮堤問題などもっと重要な問題に係われないのであろうか？
- ・今後、組織化が進むのが良いが、全体の責任者として継続的に携われるのかという問題がある。半年ごとの引継ぎではかえって不安定化するのでは？
- ・NFについて、もう少し役割と責任の所在を明確化すべきでは？

7. 今後のボランティア活動に関する課題、留意点

1. 気仙沼市役所訪問により得た情報について

京都大学が気仙沼市内で行っているボランティア活動に関して説明し、今後の活動についての情報を得るために、気仙沼市役所震災復興・企画部の震災復興・まちづくり推進課の吉田喜美夫課長補佐を9月24日に訪問した。吉田課長補佐によると「気仙沼市はボランティアの紹介は行っていない。気仙沼市社会福祉協議会ボランティアセンターという組織がそのような活動を行っている。現在、ボランティアの内容は主に仮設住宅の住民に関することが中心になっている。気仙沼高校に関しては県教育委員会の管轄化にあるので、市としては直接関与していない。」ということであった。今後、気仙沼高校以外の学校に活動を広げるとすると、県教育委員会にコンタクトする必要がある。仮設住宅住民に対するボランティア活動は長期にわたり現地に密接に関与する必要があり、京都大学がかかわることは困難と考えられる。

2. 気仙沼高校での活動について

本学学生による気仙沼高校との事前の打ち合わせと周到な資料作成・準備（3. ボランティア参加学生による学生交流会企画書参照）により今回のボランティア活動はスムーズに進行した。学習支援活動は学生の自己表現の訓練ともなり、有意義であったと思われる。校長を始め他の先生方から今回の活動に対し高い評価をいただいた。学生と生徒との懇談会において相互の交流が提案されており、京都大学によるボランティア事業の範囲を超えて交流が進む可能性がある。その場合、これらに対応するための体制や経費の問題が生じる可能性がある。一方、「なぜボランティア対象が気仙沼高校であるのか、他の学校を対象にはできないのか」という声が他より上がることも予想され、この点に関する検討が必要である。なお、気仙沼高校で配布した資料の印刷を気仙沼市内の印刷業者に依頼したが、複数の業者と見積もりあわせを行うなど、経費節減の観点から検討が必要である。

3. 養殖場での活動について

本学フィールド研社会連携教授の畠山重篤氏が水山養殖場のオーナーであることから、同養殖場には第一回ボランティアよりお世話になっている。今回も、重篤氏はじめご子息の哲氏に丁寧に対応していただいた。一方、水山養殖場は順調に復興しており、収穫したカキの滅菌装置をいち早く整備したこともあり、現在、養殖カキの生産量は宮城県で第1

位となっている。今回の活動では、カゴで飼育しているカキに付着したホヤ、ムラサキイガイ等汚損物や死滅したカキの殻を取り除き、新たなカゴに収容する作業を行ったが、このような作業は現地の雇用の促進を妨げる可能性があることからボランティアの趣旨から逸脱している恐れがあり、今後の継続については検討が必要である。一方、畠山哲氏によると、津波や地盤沈下に伴う塩害により立ち枯れた杉が火災や害虫の発生源となる恐れがあり、伐採・処理が必要であるとのことである。杉や土地の所有権、伐採に必要な手続きに関する問題はあるが、被災地の環境保全の見地からこれを今後の労働ボランティアの対象として検討する余地がある。

4. 引率教職員の確保について

ボランティア事業に関与する教職員はボランティア活動の計画から実行、その後の報告に至るまで多くの時間を割かれる。一方、活動に携わる学生のひたむきな姿に教えられることも多い。本ボランティア事業を長期にわたって継続するには、特定の個人に負担が集中しないように、組織内での話し合いにより多くの教職員による分担と交代が必要である。また、出発、帰着が早朝、深夜となるが、バスへの荷物搬入、搬出に帯同職員以外の職員の協力を得ている。この点についての配慮も必要である。

5. 移動方法、スケジュールについて

大型バスによる往路は 14.5 時間、復路は 15 時間強を要した。今回は激しい渋滞に巻き込まれることはなかったが、渋滞等があると宿舎着後の夕食（22 時まで）には間に合わない。また、京大正門前に 22 時過ぎに帰着したが、第二回ボランティアでは復路 12 km の渋滞により帰着は 23 時 20 分となった。次回の計画時にはこの点への配慮が必要である。

水山養殖場に行くには途中、幅員が狭い道路があり、大型バスを使用できないため、運転手付マイクロバスを配車した。からくわ荘の佐藤社長によると、同荘契約のマイクロバスが使用でき、これにより経費節減が期待される。今回、借用した普通自動車のレンタカーは小回りが利き、物品の運搬にも有用であった。

8. 記録

(1) 記録写真



9月23日 6:33 バスに荷物積み込み



9月23日 6:33 バスに荷物積み込み



9月23日 21:45 からくわ荘到着後夕食



9月24日 11:42 気仙沼市お魚市場に到着



9月24日 13:49 気仙沼高校庄子英利校長に挨拶



9月24日 13:51 控え室で授業内容の打ち合わせ



9月24日 14:46 一年生担任先生に挨拶



9月24日 14:54 一年生教室での授業



9月24日 15:06 一年生教室での授業



9月24日 15:26 一年生教室での授業



9月24日 15:32 一年生教室での授業



9月24日 15:33 一年生教室での授業



9月24日 15:35 一年生教室での授業



9月24日 15:37 一年生教室での授業



9月24日 16:23 一年生生徒との懇談



9月24日 17:46 一年生生徒と記念撮影



9月25日 8:16 宿舎からくわ荘を出発



9月25日 9:02 気仙沼市内の水産加工会社「八葉水産」訪問



9月25日 10:31 「八葉水産」の製品メカブを試食



9月25日 12:22 気仙沼市内「復興マルシェ」を訪問



9月25日 12:41 気仙沼市鹿折地区の被災状況を見学



9月25日 14:56 二年生教室での授業



9月25日 14:58 二年生教室での授業



9月25日 15:01 二年生教室での授業



9月25日 15:07 二年生教室での授業



9月25日 15:08 二年生教室での授業



9月25日 15:10 二年生教室での授業



9月25日 15:15 二年生教室での授業



9月25日 15:22 二年生教室での授業



9月25日 15:34 二年生教室での授業



9月25日 15:48 気仙沼高校玄関にて



9月25日 16:19 気仙沼高校二年生との交流



9月25日 16:27 気仙沼高校二年生との交流



9月25日 16:28 気仙沼高校ボランティアクラブとの交流



9月25日 17:02 気仙沼高校生徒会との交流



9月25日 17:29 気仙沼高校生徒会との記念撮影



9月26日 8:45 からくわ荘近くの海岸で



9月26日 9:10 マイクロバスで水山養殖場へ



9月26日 9:19 水山養殖場到着、畠山重篤氏出迎



9月26日 9:20 畠山重篤氏より被災状況の説明



9月26日 10:03 畠山重篤氏より被災状況の説明



9月26日 10:05 水山養殖場での作業



9月26日 10:09 水山養殖場の作業場へ移動



9月26日 10:15 水山養殖場での作業



9月26日 10:23 畠山哲氏による作業の説明



9月26日 10:28 水山養殖場での作業



9月26日 10:38 水山養殖場での作業



9月26日 10:48 水山養殖場での作業



9月26日 11:15 水山養殖場での作業



9月26日 12:00 水山養殖場での作業



9月26日 12:10 水山養殖場での昼食



9月26日 13:45 水山養殖場での作業



9月26日 14:55 水山養殖場での作業により整えられたマガキ収容網カゴ



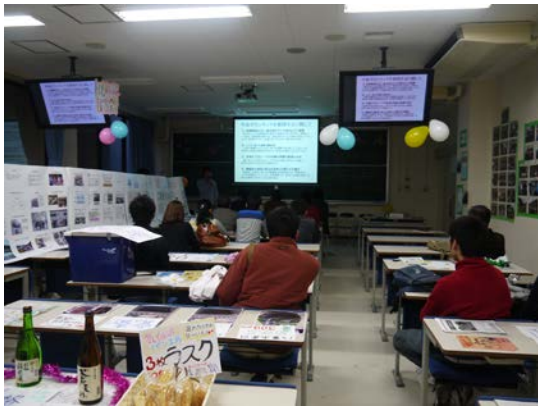
9月26日 15:06 畠山哲氏によるカキ養殖場案内



9月26日 15:06 畠山哲氏によるカキ養殖の説明



10月11日 20:08 キャンパスプラザ京都にてボランティア活動報告



11月24日 11月祭におけるボランティア報告会



11月24日 11月祭におけるボランティア報告会



3月11日 文部科学省庁舎前での東日本大震災復興支援イベントで下村文部科学大臣に取り組み内容を説明する京大学生ボランティア代表（右）



3月11日 文部科学省 東日本大震災復興支援イベントにおける京都大学のブースの様子



3月11日 文部科学省正面入口のポスター展示「京大東北ボランティアの歩み」（右）



3月11日 上記イベントへの京都大学からの参加者

(2) 第三回学生ボランティア派遣の応募チラシ

森里海連環学で東北復興を！



第3回京都大学学生ボランティア募集

京都大学では、夏休みを利用して東日本大震災で被災した東北地方の復興をお手伝いする第3回学生ボランティアを派遣します。以下の要領でボランティア募集中です。誘い合って東北の復興に出かけませんか。

<http://fserc.kyoto-u.ac.jp/wp/kesennuma>

2012年3月の学生ボランティアの様子



写真左：高校生への学習支援 写真右上：牡蠣養殖作業の補助
第2回のボランティアの様子は、フィールド研ホームページを参照

内容：労働ボランティア：学習支援、養殖業補助、その他。

研究ボランティア：期待される調査は、森林資源調査、湿原を含む河川から海まで水質調査等。（要相談）

募集人数：労働ボランティア 20名、研究ボランティア 大学院生若干名

募集対象：京都大学学生・大学院生・研究生等

募集期間：2012年 7月17日(火)～7月23日(月) 定員に達し次第締め切り

ボランティア参加者説明会：2012年 8月3日(金) 18:30～ 農学部総合館 2階フィールド研会議室(N283)

日程：9月23日午前7時 京大正門前からバスで出発（または 9月23日午後6時頃、JR「一ノ関」駅をマイクロバスで出発）

同日夜、国民宿舎「からくわ荘」（宮城県気仙沼市唐桑町崎浜4-1）着 「からくわ荘」宿泊

9月24日～25日 気仙沼高校（気仙沼市）で学習支援 9月26日 西舞根へ行き、ボランティア活動

9月27日 早朝 宿泊所からバスで出発 同夜 京都大学着

同行者：京都大学教員 2名、職員 1～2名

服装・持ち物：汚れても良い作業着など、着替え、手袋、雨具、リュックサックのような両手が自由になる荷物入れ、洗面具など。長靴は京大が用意。

費用：往復バス代、宿泊費およびボランティア保険料は、京都大学が負担。食費等左記以外は、本人負担。

応募条件：必ず学生教育研究災害傷害保険に加入しておくこと。

その他：学習支援のために、事前に準備が必要です。出発前に数回、学生による打ち合わせを行います。
できるだけ参加してください。

申し込み方法：フィールド研のホームページより、ボランティア申込書をダウンロードして、所属学部・研究科の教務掛に提出してください。 http://fserc.kyoto-u.ac.jp/data/form_kesennuma.pdf （各教務掛は申請があれば、部局所定の手続きを経た後、ただちにフィールド科学教育研究センター事務室に、FAX(内線6451)でボランティア申込書を送信してください。）

問い合わせ先：京都大学フィールド科学教育研究センター 森里海連環学分野

電話：075-753-9395（横山）or 753-2263（大嶋）

メールアドレス：cohho@kais.kyoto-u.ac.jp

期日：2012年9月23日(日)～27日(木)

場所：宮城県気仙沼市

集合場所：京都大学時計台記念館前広場
：JR「一ノ関」駅（一ノ関までは自己負担）



9. 特記事項

今回のボランティア派遣においては、前回と同様に、本学環境安全保健機構、放射性同位元素総合センターのご協力をいただき、積算ポケット線量計を貸し出していただいた。9月23日午前7時過ぎより測定を始め、27日午後10時に帰着するまでの109時間における3名の積算の線量は8.3 μSv 、19.2 μSv および17.0 μSv であった。一方、京都大学において同期間、同型の線量計により測定した線量は8.6 μSv であり、携行した線量計による線量の平均値14.8 μSv との差6.2 μSv が派遣期間中に特別に浴びた線量となる。通常、X線検診により浴びる線量は600 μSv とされるので、派遣期間中に特別に浴びた線量はこの100分の1となり、健康に影響を及ぼすレベルではない。なお、派遣期間中に携行した3台の線量計による値のばらつきは大きかった。携帯電話の近くでは、誤動作により高い値を表示することが知られており、17.0 μSv 以上を計測した2例では、線量を過大評価している可能性がある。

10. 謝辞

気仙沼高校では、校長の庄子英利先生をはじめとする数多くの先生方のご理解を得て、学生たちも納得できる成果を挙げることができた。また、今回の活動でも、畠山重篤氏、畠山哲氏をはじめとする水山養殖場の方々には色々とお世話になった。水産加工工場を見学させていただいた八葉水産の清水敏也社長、清水勝之常務には震災時の様子やその後の復興状況を説明していただいた。挨拶を兼ねて訪問した気仙沼市震災復興・企画部震災復興まちづくり推進課では、吉田喜美夫氏にさまざまな情報を伝えていただいた。宿舎としたからくわ荘経営者の佐藤達也氏には、我々の今後の活動の継続に向けたさまざまなご提案をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。

(文責 横山 壽)